



(C) mamoru / Tokyo Wonder Site, photo: Kenji Takahashi

THE WAY I HEAR, B.S.LYMAN

第四章 独想曲「19, June 1874」

鑑賞者が「テキスト楽譜」を読み「音風景」を想像するための舞台としてのインスタレーション

サイズ可変、テキスト、「日本蝦夷地質要略之図」(複製品) 石版彩色、譜面台、プリズマティックコンパス、B.S. ライマンのフィールドノート (レーザープリント画像)、夕張川上流域の川原で採取した石炭塊と川原の画像 (インクジェットプリント)、照明

グループ展「TOKYO STORY 2014」、トーキョーワンダーサイト本郷、2014.5.3 - 6.8

鑑賞者は、展示空間に左壁に配置された「前奏または前想として」という前書きを読み、真下にある棚に載せられたコンパスとテキスト楽譜<第四章「19, June 1874」>を手にし、楽譜を譜面台に載せ読み進める。作品の中核となるこのテキスト楽譜は、B.S. ライマンの北海道地質調査旅行の中から、夕張川での踏査の際に川原で石炭塊を発見する場面の前後を含めた調査をとりあげており、想者/奏者はテキストに描かれる音風景の移り変わりを通じて追想する。途中、テキストに挿入されるインストラクションによって鑑賞者はコンパスで方角を確認したり、夕張川調査で実際に発見した石炭塊に触れる動作を促される。床に置かれた小さなアクリルケースと石炭塊、川原の写真、プリントアウト画像 (ライマンのフィールドノートの川のスケッチをつないで川を再現したもの)、右壁に配置した「日本蝦夷地質要略之図」(複製) によるインスタレーションは追想のための舞台装置として機能する。

作品の主題である B.S. ライマンという人物は、明治初期、近代化を急ぐ日本政府によって鉱山技士、地質学者として、また日本人技士の養成のために雇われた外国人専門家で、1873 年 (明治 6 年) に来日し、当時まだ「蝦夷」とも呼ばれていた北海道に赴き、3 年 (通算約 12 ヶ月) 間の精細な地質調査を行った。開拓使から出版された「北海道地質総論」の他に、1875 年にライマンは調査結果から作られた日本初の総合的な地質地図「日本蝦夷地質要略之図」を出版し、調査現場で育て上げた助手達は後に日本のエネルギー開発において重要な役割を果たした。

テキスト楽譜は主にライマンによる「Geological Trip Through and Around Yesso」という報告書とフィールドノート「L10」からの引用、また文献資料による事前調査を経て、2013 年夏に約 1 ヶ月間、現在の夕張川流域等で行った現地リスニング、アウトドアの専門家の助けを得て夕張川系 (上流域) をカヌーで遡上する体験観察、各種地域資料、北海道大学図書館の北方資料室にて收藏されている資料から得た考察、そして 2014 年 1 月マサチューセッツ大学アマースト校図書館・特別アーカイブ室所蔵のライマンコレクションを調査し、該当するフィールドノート等を撮影、解読をすすめた結果などから書きおこされたサウンドスケープ・テキストから成る。



展示詳細：棚板におかれたテキストスコア、プリズマティックコンパス

< 「I. 夜明け」より抜粋 >

夜通し降りつづいた雨は、朝になってようやくあがった。
空はまだ曇ってはいるものの、今日はなんとか持ちそうだ。

川の様子はと言うと、泥の混じり気が少し減った様に思うが
白く濁っていて川底は見えない。

(あなたも足下に目をやり「川の色」を確認する)

連日の雨で水かさが増した川は滔々と流れている。

(その川に耳を澄ます)

川の向こう側ではハルゼミがあちらこちらで鳴き始め、
周囲のしげみからはベニマシコの声高で透明な短いさえずり
ハンノキの葉をつたって雨が滴りおちる



鑑賞者がテキスト楽譜を読み進めている様子

< 「II. 出発」より抜粋 >

7:10

7艘のカヌー（丸木舟）を川に浮かべ、それぞれ3、4人ずつ
乗り込み、川上へ向け踏査を開始。

(コンパスを手にとり、方位を確認する)

ノートに方位（Nと矢印）を書き入れ、川筋のスケッチを開始。
川は北東へ伸び、ゆるやかに東へとカーブしていく様子。

カヌーはすべる様に動き出し、（風があなたの頬をなで）
すぐ後ろからアイヌ達が舟を漕ぐ音が聞こえる。

川の両岸にはどこまでも広がる湿原。所々に木が点在している。
時折、クサキリ虫がチッチッと鳴いている。

7:16

右側から小さな溪流が流れ込み、
川と交わる音が次第にはっきりと聞こえてくる。

カヌーはよどみなく進み、船先で水が割れ、心地よい音がする。

(溪流の音はゆっくりと遠ざかっていく)



展示詳細：床に並べられたフィールドノートのプリントアウトが川の形をかたどる

< 「III. 再出発」より抜粋 >

9:28

左岸にはアカダモの樹々。
その合間から小鹿が姿を見せる。

どうやら川は少し先の方で大きく東に曲がっている様だ。
(コンパスを確認する)

右岸に、これまで確認されていなかった礫質泥岩。
(この辺りを少し調べたほうが良さそうだ)

9:32

皆に周辺の調査を指示し、カヌーを右岸に近づける。

オールが川底の砂に触れて、音をたてる。
アイヌ達が水に降り、カヌーを砂浜に引きずり上げると、
舟底に小石や砂利がすれる音。

(さあ、この辺りを見て回ろう)



展示詳細：ライマンのフィールドノート "L10" 画像（レーザープリント）

< 「IV. 炭塊」より 抜粋 >

砂浜を歩き回る足音

小石を拾っては、投げ捨て、また拾いながら、何かをつぶやき、時折、鉛筆でメモを取る

ハルゼミの合唱と川の音にまぎれて、対岸のしげみからはエゾセンニュウの鳴き声

耳元を羽虫が通りすぎる



鑑賞者がテキスト楽譜の指示に従って行為を行う様子

< 「IV. 炭塊」より 抜粋 >

少し離れたところから「ライマン先生！」と、誰かが興奮気味に呼ぶ声が聞こえる。

彼は水際に立ち、こちらに向かって手を降っている。

幾つもの足音が彼の周囲にあつまる

皆の視線の先には、黒く小さな塊があった（あなたの視線の先にもそれはある）

私はその塊を水から拾い上げ、（あなたも近づいて、ケースを開き、塊を手にする）

その軽さを確かめ、思わずこう言った、（あなたもその軽さを確かめ、その言葉を発する）

"Coal Pebbles!"
(炭塊だ！)



展示詳細：「日本蝦夷地質要略之図」石版彩色（複製）

< 「後奏または後想として」 >

親愛なるライマン先生

まさに先生が予見された通り、例の炭層は夕張溪谷の上流に達していました。そして結果的には日本最大の炭田の一部を形成していました。その辺りの事は、おそらく助手の方々から既にお聞きになった事と思います。

あの炭塊の発見から140年、川もその周囲もずいぶん様子が変わっていました。本当はきちんと私の北海道調査旅行の事をお伝えしたり、マサチューセッツで拝見した先生の資料に関してもお聞きしたい事がいろいろとあるのですが、少々長くなってしまいましたので、今日はこの辺りでペンを置くことにします。

耳を澄ましつつ、

2014年5月3日 mamoru